



世界遺産を守る

# 熊野速玉神社のナギの保存修理



熊野速玉神社のナギ

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録資産には熊野古道などの道や神社・お寺などの建物以外にも那智大滝などの名勝や樹木などの天然記念物も含まれます。それらを守っていくこともわれわれ文化財保護担当者の使命です。最近の事例を紹介しましょう。

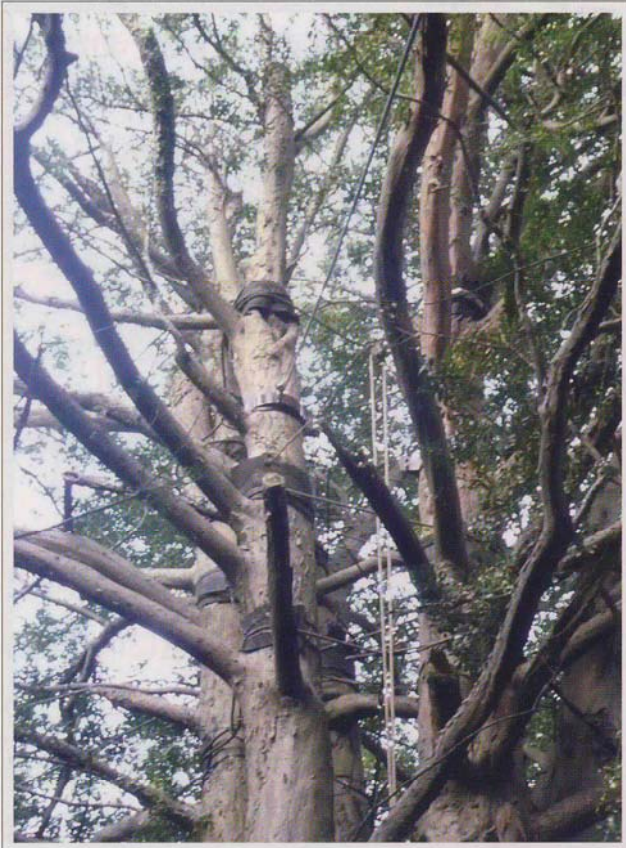
熊野速玉大社の境内には高さ約18m、根回り約5.5mのナギとしては日本最大級といわれて

いる巨木があります。このナギは平安時代末の平治元年（1159）、社殿の落成記念に平清盛の息子である平重盛が植えたものと伝えられており、そうすると樹齢は850年ほどとなります。ナギは暖地性の山に生える常緑の針葉樹の高木で、ご神木としてよく神社の境内などに植えられています。葉が裂けにくく、ナギが海が凪ぐことと通じることから、家内安全や海上交通のお守りとして珍重されています。

このナギは地元のお年寄りの話では昭和28年の紀伊半島を襲った大洪水のとき、熊野川の氾濫で幹の部分は水没しましたが、千手観音の神の手のように延びたその枝々に熊野川を流されて来た人々がかまって命が助かったということで、本当の意味でご神木と言えるものです。

このナギは一見すると葉が青々と繁って何も変わったことがないように見えますが、実は大変危険な状態でした。主幹の内部が腐って空洞になっていました。熊野速玉大社の要請を受け、樹木診断を日本で最先端の技術を持った神戸市の専門業者に依頼して実施しました。音波探査





ナギの上部



ナギの内部消毒作業

で内部の空洞率を調べると、50%を超えていました。このままでは台風などの強風で倒れる可能性が高く、緊急に対応する必要がありました。

文化庁の担当調査官とも相談して、樹木診断をした樹木医の先生と実施方法について考えました。まず、倒壊防止のため支柱を三カ所に立てワイヤーロープで引っ張って支えることにしました。支柱の規模とロープの太さは木の重量やバランスを考えて、複雑な構造計算をして設計しています。その後、枯れている枝を切って、内外部の腐っている部分を消毒し、根の周りに栄養剤を注入し、さらに日当たりを確保するために周囲の木を伐採ばっさいしました。作業員さんが幹の中に入って腐っている部分を掃除すると、両側の裂け目から反対側が見通せるほど空洞化が進んでいました。裂け目には樹脂製のカバーを付け補強しました。

こうしてナギの保護作業は完了しましたが、支柱をしても、実は倒れる可能性があると言った樹木医の先生から言われました。ただし倒れる方向は決まっており、境内の宝物殿ほうもつでんの方向には倒れないそうです。樹木も生命体である限り、寿命というものがあるのです。

このナギの木は平安時代から現在まで、人々の歴史を見つめ続けてきました。源平の合戦や南北朝の対立、戦国時代の堀内氏の合戦、江戸時代の水野氏の統治など、さまざまな時代において、熊野速玉大社に参詣した多くの人々の崇敬すうけいを受けてきたのです。この貴重なご神木をわれわれの時代に枯らすことはできません。ナギが少しでも長生きできるように、手助けすることがわれわれの使命であると言えます。